慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「寿序」について
Sub Title	A study of Shou xu (寿序) : a Chinese felicitation
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.1 (2017.) ,p.136- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20170331-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〈特別寄稿〉

「寿序」について

佐藤一郎

中国の伝統学会に出席すれば、四面に詩や文章、それに書などが飾られていることに気が付くだろう。寿宴にも必ず四面に詩文、書が張りめぐらされていたのは、歴史的な事実である。数えの四十にはじまり、十年毎に長寿の宴を開く習慣があるが、その四面に書かれた詩文や書絵などがすなわち寿序である。

四十、五十だけでなく実際には六十一歳の還暦、七十、八十と数え九十に至る例はごく少ない。還暦だけは満である。乾隆帝（一七一一～一七九九）が歴代の皇帝の中で一番寿命が長かったが、それでも八十の賀宴を開くのがやっとだった。日本の中国学者で「九十の賀宴」を開催したのは宇野精一先生と福井康順先生であるが、両方の宴席に出席する光栄に浴したのが筆者である。

日本のことはさておき中国では、この寿序の風習は次第に南方から北方へ、さらに全中国にひろがり今日ではほぼ定着しているようである。清朝までで長命だったのは沈徳潜（一六七三～一七六九）であるが、その没年は乾隆三十五年（一七七〇）九月である。沈徳潜については「沈徳潜と袁枚の交渉をめぐって」（『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』研文出版、二〇〇六年三月所収）と「乾隆帝左右の文臣の役割～御選『唐宋詩醇』と沈徳潜の場合～」（『國學院雑誌』特集　中国学の現在、一〇六（一一）、二〇〇五年十一月、所収）とに詳しい。後者にいう。「ところが皇太后の七十歳の祝宴に参列するため二十六年に上京して『國朝詩別裁』を奉呈した際には、一転して銭謙益がらみで不興を蒙ったのである。」しかし乾隆三十五年九月に沈徳潜の「死の知らせが都へとどくと、帝はとくに太子太師

の栄位を贈り、賢良祠にその霊を祭り、謚を文懿と定められ、さらに追悼の御製詩まで賜ったのである。」

前の論文で袁枚（一七一六～一七九八）に言及しているが、沈徳潜と袁枚は同年の進士であり、一生付き合わなくてはならないのが中国での慣行である。しかも沈徳潜が詩においては格調派の指導者であったのに対し、袁枚は性霊派の指導者であり、沈徳潜が蘇州の長洲の人であるのに袁枚は杭州の人であった。袁枚は弱冠進士合格。詩を作り題して「同一百九十三人試博學鴻詞于保和殿下、時班中無弱冠者、諸王都來疑年、口號以對」という。乾隆四年（一七三九）進士二十四歳、改翰林院庶吉士。沈徳潜はすでに老人であり天下に知らる。乾隆四年の進士、改庶吉士。両者の関係は複雑であり事実両者は一生付き合う羽目になった。沈徳潜が兄の袁枚を採らずに三妹の袁機を『清詩別裁』の中で選んでいるのもむべなる哉である。（『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』中の拙文参照）『袁枚全集』（江蘇古籍出版社、一九九三年）第七巻は、袁棠・袁杼・袁機の『袁家三妹合稿』と『随園女弟子詩選』を収める。袁枚の妻妾、三姉妹、女弟子には才女がきわめて多いが、この袁機の悲運のごときはまさに列女伝中の人物に近く、沈徳潜の道徳観にぴったりであろう。袁機の『素文女子遺稿』には、巻頭に兄枚の「女弟素文傳」を載せている。

『素文女子遺稿』中の袁機詩と『清詩別裁』の彼女の「聞雁」には、極めて大きな差異がある。前者では、

秋高霜氣重
孤雁最先鳴
響遏碧雲冷
……

となっているのに反し、『清詩別裁』本は、第三句以下にいちじるしく手を入れて、次のように改訂している。

響入空閨靜
心憐永夜清
自從成隻影
同是感離情
誰許並高節

寒林有貞女

この後に沈德潛の評が入っており、「應に母家に歸りて自り後の作なるべし、自ら隻影を憐むも、靜正貞を守りて、言外に絶えて怨尤すること無し。以て其の志を哀む可し矣」とある。

袁枚の寿序の作としては、『小倉山房詩集』巻二十三の「湘山子四十歳索詩」「鄭南耕八十歳索詩」二首、巻二十七の「彭芝亭大司馬八十索詩」四首」、「祝史抑堂少司馬七十」四首、巻三十一の「七十生日作」、巻三十四の「書制府六十寿詩」四首、巻三十六の「八十自寿」十首、『補遺』巻一の「滌齋先生八十索詩」二首、巻二の「陶京山六十索詩」十首などがある。なお、『國學院中國學會報』（旧名『漢文学会々報』第十七輯、一九七二年）に「袁枚における詩文の位置」を掲載している。

北方の出身の紀昀は、河間府献県（今河北省献県）で生まれた。頃は清の雍正二年（一七二四）、亡くなったのは嘉慶十年（一八〇五）である。『紀昀評伝』上・下（南京大学出版社、一九九四年）、周積明著（一九四九年浙江省鎮海の人。現在湖北大学中国文化史研究所副所長。教授）がある。紀昀の同時代は〈乾嘉〉の時期であり、大学者が続出した頃だった。例えば、紀昀の従兄紀昭も乾隆二十二年の進士で、『毛詩廣義』の著がある。紀昀自身は乾隆十九年の進士。年は三十一歳、庶吉士に改められた。「最も号して人を得たり」といわれるのは王鳴盛・王昶・朱筠・錢大昕等も一緒だったからである。庶吉士からさらに翰林院入りを果たした。乾隆帝は五十の大寿の年に、紀昀たち群臣を率いて泰山に登った。紀昀の文才を誰よりも愛したのは乾隆帝である。その絶妙のやりとりはまさしく紀昀の才能を示したものであるが、親戚を弁護した廉でウルムチに流されたが、『烏魯木斉雑詩』百六十首を読んで、友人錢大昕を感激させた。

乾隆三十五年（一七七〇）の十二月に、都の帝は突然紀昀のことを想出し、特に帰るようにお命じになった。翌年六月、紀昀は万里の地を跋渉して帰郷した。帰郷したもののなかなか乾隆帝のお召しの声がかからなかった。再び翰林院入りを果たした直後に『四庫全書』の総編修官を命ぜられたのである。事実上『四庫全書』の編集長は紀昀であり、乾隆四十六年（一七八一）十二月に『四庫全書』は完成、それに続いて、『四庫全書総目』編集をも果たしたのは

乾隆五十八年（一七九三）のことだった。

阮元の「紀文達公遺集序」に言う、「撰定するところの『総目提要』は多くは万余種に至る。古を考えては必ず諸を是に求めて論を持し、努めてその平允を得たり」と。

紀昀の晩年、乾隆四十四年（一七七九）には内閣学士・兼礼部侍郎、乾隆四十七年（一七八二）には兵部侍郎に択ばれ、兼ねて文淵閣直閣事となった。最後には礼部尚書、協辦大学士・太子太保、国子監事を加え、并せて紫禁城騎馬を賜ったのである。

紀昀の北京の屋敷跡は一部残っているが、大部分は隣接した施設に割かれ今は見当たらない。それでも一部だけでも現在目にできるのはまだましな方であろう。

この時期はまさしく考証学の全盛時代である。このことに付いては、すでに筆者は論文「同時代人姚鼐と戴震・段玉裁」を『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第二十四号（一九九二年十二月）に発表している。同論文で、「乾隆・嘉慶両帝の治政は、清朝考証学の全盛時代である。この時代の学問の中心は宋代以来富裕をもって天下に聞こえた江南地方にあり、ここでは文字学・音韻学・校勘学などの知識の集積の上に築かれてきた実証的な経学の研究が脈々と継承されてきたのである。とくにその全盛期に青年時代を生きた江南出身の知識人は、通常は考証学の系譜に数えられない文学畠の人でさえもが、多かれ少なかれ時代の風潮の影響を受けざるを得ない。性霊派の代表格である袁枚や、桐城派三祖の第三代である姚鼐のような詩文の大家にも、考証学の成果を意識して取り入れた」人がいるのである。姚鼐の如きは一時期、四庫全書館で働いてさえいるのである。姚鼐（雍正九～嘉慶二〇・一七三一～一八一五）や桐城派については『中国文章論』（研文出版、一九八八年五月）をご覧いただきたい。尚、中国訳は上海古籍出版社から出ている。訳者は慶應義塾と関係の深い趙善嘉氏である。

実はもう一本「江南の文学」について書いたことがあった。内容は四つに分れ、一、南京と蘇州、二、科挙の合格者比率、三、安徽の地位、四、北方文学から南方文学へ、である。『江南の士大夫文学』（近代文藝社、一九九四年五月）二、の「科挙の合格者比率」に、次のように出ている。「清の乾隆帝は『江浙は人文の淵藪である』と評価しているが、その産業と文化の水準は全国を圧し、学者・文人の輩出は目覚ましく、進士合格者の数も抜群で他の追随を許

さない。譬えば清一代を通じて進士の首席及第者である状元は、江蘇四十九人、浙江二十人、安徽九人であり、第二の榜眼は浙江二十九人、江蘇二十六人、江西十人、安徽七人となり、第三位の探花は江蘇四十二人、浙江二十七人、湖南六人となっている。（『清代科挙考試述録』）いかに長江下流地域の出身者が好成績をおさめていたかがわかる」

以上の事実からも、江南地方が中国文化の中心に位置していたことは明白である。ことに士大夫の文学すなわち詩文の文学に於いては北方に対する南方の、特に江浙の優位は疑いない。かくて寿序の文学においても、南方から北方への道を辿るのである。

清朝により精しい者としては、何時からこの傾向が始まったのか明言できないが、南宋の頃からではないかという漠然たる思いはある。これを実作によって証明できないのが残念である。乾隆帝の『唐宋詩醇』でも南宋では陸游だけ一人のみである。この陸游あたりを精査すれば、この疑問も解けるかも知れない。紹興の鑑湖のほとりの陸游の旧居は訪れたことがあるが、今では畠の中の碑が一本建っているだけである。外には何もなくて、道路をへだてた水面がひろがるだけだった。大詩人の旧居にしては、わびしい限りである。

陸游の詩の訳を果した小川環樹先生は、旧居までは足を運んでいらっしゃらない様である。してみれば二十一世紀旅行の同行講師を務めた小生も、同旅行社に感謝しなければならない。母と意見が合わず別れさせられた前妻と偶然再会した市内の沈園は、今は観光名所となって久しく建物も新しく建っている。書の大家青山杉雨の『江南遊』（二玄社、一九八三年九月）でも記述と写真が出ているくらいである。鑑湖のほとりの旧居跡よりも、沈園の方がはるかに有名であるといえるのではなかろうか。

現代に移ると、北京の老舎の旧居には、妻の胡潔青が住んで居り、その居間の周囲の壁には中国画の大家である胡潔青女士の絵が掛けられていた。

元、お茶の水女子大学教授の故中山時子女士[1]は、老舎研究を生涯続けてきた人である。同女士の北京行きに筆者は同行したのである（付記参照）。

魯迅は更に有名であるが、その『魯迅選集』（一巻～十二巻、増田渉・松枝茂夫・竹内好編集、岩波書店、一九五六年）第十巻『花辺文学』に「北人と南人」なる一文が入っている。「南人は北人の眼中では被征服者」であり、「私の

見るところでは、北人の優れている点は重厚さであり、南人の優れている点は機敏さである」「ところで文章を書く人は南人が多く、北人はむしろその影響を受けている。」と指摘している。もともと杭州湾南岸沿いの紹興出身の魯迅にとって、論争相手の事はよく知らないが、南人のために大いに語りたいのはわかるというものである。

政治家では南方から北方への北伐を続けた孫文と北方から南方への道を進んだ毛沢東がいる。藤井昇三・横山宏章編『孫文と毛沢東の遺産』（研文出版、一九九二年）がある。この問題意識は当然早くから生じたものであろう。広東から北へ進んだ孫文と、北京から南へ勢力を拡大した二人の生き方は対照的である。

魯迅は父親の死が漢方の不備によるものであることを痛感して、日本へ留学し、仙台の医学専門学校（今日の東北大学医学部の前身）へ迷わずに入学した。ここで出会ったのが大阪の『適塾』出身の「藤野先生」である。

藤野先生の故郷である福井県あわら温泉には適塾に学んで以降の手法で医院の復元工事が行われ、側には銅像もあり、往時を偲ぶことができる。かつて適塾の会員であった小生の手元には、その機関誌である『適塾』十一号昭和五十三年、十七号昭和六十年、第十九号昭和六十一年、二十号昭和六十二年が残されている。今日でも適塾は中之島の南岸、土佐堀川の最上流の南岸に残っていて、往時を偲ぶ事が出来る。今は記念館として隣近所の建物はなく、火災にも安全である。筆者も一度なかへはいって見たが大阪の二階建の旧町家がこれ程完全に保存されている例はほかにはない。

最近梅渓昇氏の『緒方洪庵』（吉川弘文館、二〇一六年二月）から出版されたが、梅渓氏は一九二一年生まれ（大正十年）、一九四三年京都大学文学部史学科を卒業、大阪大教授、佛教大学教授を経て、元大阪大学名誉教授。二〇一六年二月に逝去された。適塾保存会の理事であったが、道頓堀際の洋食店で丸山信君[2]と二人でご馳走になったこともある。梅渓昇氏が『緒方洪庵』という固い書物を書上げたのはみごとと感嘆するの外はない。震災より二年早く生まれてこの著述である。もちろん目上の人や友人はほとんどいなくなってしまうのである。唐の韓愈が「十二郎を祭る文」にいうように、「少者没して長者存し、強者夭して病者全からんとは。嗚呼、それ信に然るか。それ夢なるか。そのこれを伝ふること、その真に非ざるか。」と嘆く。これが普通の場合であって梅渓昇氏の例の如きは、もう周辺には誰もいないのである。

書物に戻ると「都道府県別適塾門下生氏名」があり、福井県二十五人藤野升八郎とあるのが魯迅のいう「藤野先生」の適塾時代の姿である。紹興の魯迅博物館には藤野先生の像があり、異彩を放っている。

ちなみに適塾の首席で一番有名なのは大村益次郎と福沢諭吉である。適塾は進級制で大阪では市民からは例外扱いだった。「適塾の書生さん」はまことに着たきりのボロどもでその上乱暴者揃いだというからたまらない。ただ勉強だけは出来た。蘭学はかくて商都大阪で、なんの出世とは関係なしに花ひらいたのである。適塾に関する著書は、『適塾をめぐる人々～蘭学の流れ～』伴忠康著（創元社、一九七八年二月）や、『適塾の維新～福澤諭吉別伝～』広瀬仁紀著（学芸書林、一九七六年）、『大阪の学問～懐徳堂・適塾～』（大阪大学放送講座、一九八〇）があり、その中には「適塾の人々～福沢諭吉・大村益次郎・橋本左内・佐野常民・長与専斎など～」伴忠康・梅渓昇著などがある。[3] また、小冊子だが『緒方洪庵と適塾』が適塾記念会より発行されており、適塾の模型が掲載されている。この模型によって二階の様子が一目で判るというものである。畳一枚毎に書いてあり、ヅーフ部屋・塾頭部屋・塾生大部屋・塾生部屋・物干場などがある。

江戸幕府は蘭方の医学のみを最初に公認したが、緒方洪庵の実力を認めて、江戸の侍医に迎え入れたのである。洪庵自身は大阪に住み慣れた上、健康上の理由から住みつづけたかったが、出身藩の岡山の木下藩二万五千石に圧力が懸かり、同藩からの要請でようやく腰を挙げることになった。洪庵は西洋医学所頭取として赴任し、将軍の侍医を勤めていた。ただし江戸での暮らしはわずか十ヶ月であって、急死したのは一八六三年、文久三年六月十二日、享年五十四であった。その枕元には大村や福沢がかけつけていた。ただその死はそれより早く、間に合わなかったのである。墓は駒込高林寺にあり、一度参拝した事がある。

さて、寿序の話に戻すと、九十の賀宴を開催できるのはごく少数であり、人間には寿命があるから誰しも死亡する事は確かである。死後の世界を説くのは宗教であって、孔子は死後のことを説いていない。死後の事は分からないというのが本当の答えであろう。

私は慶應義塾を定年後、すぐに大正大学文学部中国文学科に勤め、七十一歳まで定年後一年多く勤務し、その直後から二十一世紀旅行の同行講師となり、年に一回神田の學士會館で講演を開き、同機関誌『旅ニュース』に執筆した。[4]

留学経験のない筆者が最初に中国へ行ったのは山西省方面であり、経済学部の永戸多喜雄団長・筆者は副団長、立間祥介君が秘書長・法学部の山田辰雄君や中文の岡晴夫君も一行中に入っていた。はじめて中国大陸を見た時は感激だった。太原に宿泊、晋祠の涌水の池に行ったのはこの時である。中国では水道水は飲めないが、飲めるような優れた泉があるとすぐに、天下第一泉、天下第二泉といったような名称を付ける。この泉は本当に綺麗でその側まで降りられるようになっており、水をたっぷり飲んだのである。更に唐代の浄土宗の祖、善導の玄中寺へ一行は登ったが筆者は留守番役を勤めた。石炭が豊富で露天掘りの現場を見、雲崗石窟に行った。

二回目は國學院の「楚辞の会」に参加し、武漢大学の人を通訳に屈原関係をひろく廻ったものである。車で南京を通ったが、街の様子が分からず歩いて苦労した事は覚えている。岳陽楼・君山へ行ったのもこの時である。

三回目は松浦友久団長、佐藤一郎副団長の下で李白の遺跡を探りに馬鞍山市に行った。李白の墓や長江のほとりの衣冠塚などを尋ねたのであるが、一週間ぐらい中国の研究者と同じ宿に泊まり、まさしく「寿序」と同じような経験をしたのである。早稲田の松浦君は漢詩が作れるからいいが、小生は漢詩は作らないというと、それならば字を書けという訳で、なれない筆を無理にも持たされた。四面詩や書画で埋まったのはいうまでもない。この時この秋に桐城で桐城派の学会が開かれるということを聞き及んでさっそく出席の回答を出しておいた。実現すると上海の交通大学まで人を寄こし、朝の洗面から学食での食事、交通の案内まで至れり尽くせりだった。洗面の際に中国人はお湯を使う事もはじめて見て知ったのだった。学会は会の後の食事の時などは、巣湖という大きな湖があるから食卓に蟹が山積みされた。また、長老から順次席を立つ事も覚えた。まさしく「長幼序有り」である。また、硯などの記念品を戴いたのもこの学会である。

あとは中国旅行は多くなるから順序は覚えていないが、多分二十回以上は行っているだろう。学会の招待状（最初のうちは中国大使館へ提出）でよく有栖川宮公園の前通りを通ったものである。なかなか手続が面倒だった。今では旅行社を通してすぐに手続が出来、旅行が歓迎される世の中になったのである。

二十一世紀旅行の中国の旅では「唐宋八家・韓愈・柳宗元・蘇東坡ゆかりの地を巡る旅」とか「孔孟の故郷と李白・杜甫歴遊の地を訪ねる」とか「紹興・寧波と天台山、各時代の名跡を味わう旅～王羲之・陸游・王陽明・魯迅ゆかり

の浙江省～」とかがある。最後は二〇一二年九月一日～八日の七泊八日間であり、「黄崖関・娘子関と古都北京をめぐる華北の旅～天津・石家荘二つの長城と『三国志』趙雲故里を訪ねて」となった。同僚の山下輝彦君と再会したのは北京城であり、当時北京大学に留学していたのである。これらの旅はいずれも学士会館で資料を渡し、その後一時間半講演をし、質疑応答する事になっていた。この他にも中国へは個人旅行で度々お邪魔し、魯迅の実家などは三回ほど訪ねている。

同じところに何度も足を運ぶのも悪いものではない。一回目に桐城に行った時には孔子は廟に祭られ、二度目に行った時には撤去されて博物館となり、三度目に行った時には布の像がぶら下がっていた。道路は一回目には悪路もいいところだったが、二回目には大分よくなり、三回目には舗装されており驚いた。安徽省の奥地でもこの通りだから沿海地方の大都会についてはいうまでもない。

かくて寿序の話は脱線に脱線を重ねているようだがそろそろ御開としたい。

注

（1）女士は『随園食単』（柴田書店、一九七五年）の監訳者で、湯島聖堂の中国料理教室の専門家。土曜談話会同人である。

（2）筆者の友人、文学部図書館学校卒。福沢諭吉研究で成果を挙げる。『福沢諭吉門下』（日外アソシエーツ、一九九五年）他。慶應義塾大学を定年退職してから、前上田短大教授・図書館長。

（3）これは大阪大学放送講座として近畿放送ラジオ・昭和五十五年十月十二日から五十六年一月四日、毎週日曜日、午後九時～九時四十五分まで。

（4）同『旅ニュース』二十八号の「『史記』の遊侠の精神と『水滸伝』」をきっかけに、三十一号の「蘇東坡と三国志《二つの赤壁》の旅」、『旅ニュース』四十号「桐城派と曾国藩・李鴻章」、「陳子昂・白楽天の詩跡と清朝皇宮文化の旅」、四十三号「随想・新中国理解のために（一）史記・三国志・水滸伝の世界」、四十六号より「随想新・中国理解のために（二）魯迅と郭沫若」、四十七号「随想新・中国理解のために（三）桐城派と文学革命」、四十八号「随想新・中国理解のために（四）思想遺跡」、四十九号「随想新・中国理解のために（五）世襲と科挙」、五十号「随想新・中国理解のために（六）漢文と中国語、「随想新・中国理解のために（七）北方と南方」、五十二号「随想新・中国理解のために（八）対の思想」、五十三

号「随想新中国理解のために（九）『論語』と『孟子』」、五十四号「随想新・中国理解のために（十）王陽明と李卓吾」、五十五号「随想新・中国理解のために（十一）辛亥革命百年」、五十六号「随想新・中国理解のために（十二）遣唐使船の昔と今」、五十七号「随想新・中国理解のために（十三）不老長寿と薬・酒・茶」、五十八号「旅行業廃業のご挨拶　二〇一二年十二月十日、代表取締役会長　齊藤和弘・代表取締役社長　坊野正弘」。「随想新・中国理解のために（十四）」は、「独・仏国境の街」で書いたが、遂に発行されずに終わった。

付記

筆者は一九八二年の「老舎著作愛好者訪中団」に参加して北京を訪問している。同行者には故小野忍東京大学教授・元慶應義塾大学文学部講師の夫人純子女士（同女士からの手紙が筆者の手元にある。）お茶の水女子大学卒業の若い女性達他があり、筆者たちは故袁世凱の北京時代の屋敷に住み、北京大学に留学中の人見豊君（当時慶應義塾高等学校教員）に連絡事項があり、夜訪ねて来た。翌朝、お茶の水の卒業生たちから、瞳みのるがいたなら一目会いたかったとの事。

同行者中の「北斗」同人は、伊藤敬一。東京外語大学卒。都立大学教授→東京大学教授。土曜談話会同人。著書に『「老牛破車」のうた――おおらかに、しなやかに日中友好を――』（光陽出版、二〇〇七年）。その出版記念祝賀会発起人は、阿部兼也・尾上兼英・佐藤一郎・田中義教である。とき、二〇〇八年二月十六日（土）、ところ、学士会館分館一階「ポルタ・ロッサ」である。

なお丁玲と洛賓基が訪ねて来た事があり、丁玲には伊藤氏が、洛賓基には筆者が当たった。洛賓基の「長白山の人参」を『讀賣新聞』の日曜版で紹介した事があった。場所は北京市の同和居である。北京、山東料理。

中国側の記録では以下の通りである。

三月二十六日（金）十三時五分　JL七八一便で北京着
十八時十分出発。十八時三十分　中国人民対外友好協会副主席副会長・詩人林林主催歓迎宴会、場所　仿膳
三月二十七日（土）八時三十分　八宝山老舎霊堂参り
十五時四十五分出発　十六時　老舎宅着　座談会
三月二十八日（日）老舎家族との座談会　場所　対外文化協会
十四時出発　胡同参観
三月二十九日（日）八時三十分出発　胡同参観　十三時三十分出発　映画スタジオ見学

三月三十日（火）午前　友誼商店　十三時出発　十四時二十五分ＣＡ五一一〇便　済南へ向かう
三月三十一日（水）午前　老舎著作学術交流会　場所　山東大学
　午後　済南　老舎故居見学・夜曲阜へ向かう
四月一日（木）曲阜名所旧跡参観　夜四十六次汽車で北京へ帰る
四月二日（金）五時十分　北京駅着　午前　休憩
　十四時出発　故宮・北海公園見学・遊覧
四月三日（土）八時出発　栄宝斎見学・買物
　十三時四十五分　出発　中國作家教会と座談　場所　対外友好協会
四月五日（月）八時三十分出発　天壇公園　友誼商店
　十六時十五分　ＪＬ七八二便により帰国
四月三日夜は中国の歌・踊り・京劇などを見る予定です

手元のメモでは以下の通りである。

護国寺は、奥野信太郎先生訳の『老張的哲学』に描写された小揚子胡同近し
缸瓦市基督教会　またこの付近胡同に住む満族、辛亥革命以来兵士の給料なし、それ故多く教会に入り、生活の道をみつける。
（許氏によれば満族に対して現在の中国、差別意識少なし。風俗習慣言語似ているためか。）
ロンドン会の主要教会『老張的哲学』で救世軍の描写。それは教会での活動反映。
北京基督教会缸瓦市堂、老舎教会執事たり。一九二一年から一九二二年まで、この教会の胡同に住む、重要な交友関係を結ぶ。革命家になった人もあり。
昼食は、清真「東来順飯荘」羔羊肉。
北京撮影所では、「茶館」「駱駝祥子」「竜鬚溝」の三本の一部を見る。スタジオ及セット見学　吉林人参の店頭広告、『金光大道』浩然　二つの路線の主張を自己批判の上復活すると聞く。夜「物資礼堂」にて曹禺「日出」二幕まで。
三十日（火）雍和宮　国子監散歩　首都博物館～李大釗展
　済南　南郊賓館泊、夜「山東の老舎」「聊斎志異」の映画

三十一日（水）済南　軍の施設にて、渋谷誉一郎君に会う。当時同大学学生。
北京の作家としての老舎
地域的で全体的なひろがりのある作家
純粋の北京語　胡同・店・地域性。前期の思想変遷
人生の複雑性知って温く、これに対す。肌のぬくもりの人柄がよく反映する作家
大きな文学団体には属したことなし。老舎の特徴。独立した作家。
文学運動を中心に礎える文学史では軽視されがち。
李清照記念館修理中　大明湖　李白と杜甫の会った小島
①済南故宅　南新街～井戸あり。三年住む
②以前の斉魯大学→山東医学院　老東村四号
三ヶ月老舎住む
③斉魯大学　二度目に住んだところ。教員住宅　済南事変直前
最後に一家でここに住む
欒先生は老舎の老朋友、その娘さんの話
老舎、ここに資料残し、北京へ行く。沈先生の援助で最後の脱出列車に乗込む。南の部屋は家族用
北方の部屋は老舎一人の書斎。（三十七年八月～十一月まで）
◎一九三〇年止まり，また事務室（現在も本部のような建物）約一年近くの間暮らす
「大明湖」執筆の部屋、また「月牙児」中にも大明湖の描写あり。済南で四年住む事になる
四月一日（木）孔子廟の右側の一角に故宅あり。
故宅故井あり。一九二〇年孔徳成生る（第三夫人出生）七十七代目。
四月二日（金）午前中　国子監（首都博物館、国子監は孔子廟）
○名碑　康熙四十八年三月二十日、貢士戴名世題
等二百九十二名
第一甲　趙熊詔　江南武進人
戴名世　江南　桐城人（拙著『中国文章論』、研文出版参照）
繆沅　江南　泰州人

進士及第は一甲の三名のみ
第二甲は、進士出身、第三甲賜進士及第
集賢門内は首都図書館（国子監学問所）
方家胡同→家～となる。
安定門百貨商場のショーウインドウ玩具展のスローガン「只生一個孩子好」
文芸戦線における労働模範　老舎はながく北京にいる。人民作家の呼称。第二代三世代に影響及ぼす。
作家協会についての紹介
作家の自身の希望により結成。一九五三年に文学工作者協会の名称より改める。二クラス。
総会と分会の会員　一七〇〇名。
総会会員は創作活動ですでに成果を挙げた者に限る。二冊～四冊の本を書いた人。
主席団は現在の有名作家から成る。現在巴金
老舎副主席のとき茅盾が主席。
○作家と出版社との関係
作家協会は人民団体。出版社は企業。
人民文学出版社は作家にとり、優れた作品を書けば発表場所の心配なし。原稿料割に低い、他の国と違うところ。作品の原稿料の他に、毎月給料が出る。原稿料に頼って生活できる作家はただ一人、巴金。他の作家はすべて給料で生活。
著作の多い作家は稿料と給料、この制度に満足。
作家の物質上の権益と政治上の権益を守る点ではまだ足りない。
作家の知らぬ間に、映画化・テレビ化される。
このような問題も今後は作家協会で解決してゆく。
○ある作家の評価
あるべき評価まだ得ていない。作家協会の主要方針。正しい方向に導くことにあり、方針の中で、「百花斉放、百家争鳴」これ容易ではない。
文学刊行物の方針ともしている。
○作家たちの福祉。夏、廬山や北戴河へ行かせて作家たちを保護している。
○編集者の能力により、有望な作家をつかまえる。

出版社は競争している。編集者は作家を兼ねる。

現在の中国。

作家の死後二十五年は遺族に出版権

○専門作家は十数人から二十人。

丁玲・艾青・巴金など。

○地方にも通勤せずに、原稿を書けばよい作家がいる。

作家協会の学習活動には、専門作家に参加してもらう。北京の王蒙・劉心武は半年は訪問取材、半年は執筆である。

創作休暇

作家所属の仕事先から三ヶ月〜半年の休暇を申請させて、与える。

○趙樹理を代表する一派をジャガイモ派という。北京へは会議の時だけ出て、あとはすべて農村にいる。柳青・周立波の三人だが、周立波と柳青の読者は知識人。しかし趙樹理の読者は北京の最高の知識人から字の読めない農民まで。

老舎は下町の人を描いたが、老舎の趙樹理に与えた評価は高い。趙は一九四二年から四三年に有名になるが、解放軍元帥の彭徳懐が高い評価を与える。八路の副総司令が山西の小新聞の趙の作品を発見し推薦の言葉を書き宣伝。しかし、人民文学時代の評価は相対的に低くなる。

丁玲に対する評価。

二十数年間、創作の権利を失う。この逆境にありながら、自信を失わず創作停止したことなし。北大荒（黒竜江省）へ行かされたが創作停止したことなし。

今年七十六歳になるも意欲を持ち長編小説を書いている。昨年十冊近く出版。一昨年乳癌を手術するが経過良好、精力たいへん盛んにして、何時間でも演説する。中国の先輩作家中、声望ある作家である。

胡喬木論文『紅旗』発表。

毛沢東の優れた点、悪いところを指摘する。

これを補足してもらいたい。

馮牧の答え。

第一に、中国作家の最大関心事。

第二に、毛沢東「文芸講話」の四十周年紀念をあと二ヶ月程で迎える。原則的問題きり云えない。

毛主席講話紀念のため中国で學術討論会が開かれよう。毛文芸思想について文芸界には六十一総会より統一されている。
胡喬木談話
第一正しい目で毛主席文芸思想見る。大部分の作家が賛成していると思う。
これは少数派なるも、専門的に本を書いたことがない。
文芸体系あるかどうかに意見ある者あり。
それは生前偉大な政治指導者であり、誰にも代れない仕事をしたからである。
毛文芸路線は原則的に正しいものである。

毛文芸思想に対する三つの意見
第一、延安文芸座談会講話、重要な深い意味がある。
第二、「百花斉放、百家争鳴」人民内部の矛盾を正しく解決するという意見
第三、文芸著作「文学工作者に対する談話」で、文化伝統と外国の優れた芸術を批判的に摂取する。
この三つが毛沢東の基本的原則と考える。
この原則に対し、胡喬木氏が適當なまとめをしているので、これにわたしも賛成している。
そして今後文芸界で実行に移さなければならないと考える。
「文芸は労働者・農民・兵士のために奉仕する」の課題は、適切でないと考える。「労農兵のため」でなく、人民のため奉仕する、と現在では広汎になったと考える。
いま、作品の思想と内容が統一しているかどうかを基準としている。もし政治第一を強調すると、概念化していくと思われる。それ以外の毛主席の文芸意見に対しては、今後学術問題として討論していきたい。
　もちろん毛主席の文芸思想の文芸と生活、民衆闘争の関係は正しいもの。私たちの一致した態度は文芸思想について勉強すると共に、新しい歴史条件に従って発展させていかなければならない。
毛思想のものなら、すべて正しいとする考えには賛成できない。
しかしすべて否定するのも正しくない。